

乳児の自発性を促す見守りの重要性

神原里奈¹・三須朋子¹・カルマール良子²

(¹社会福祉法人常石会 幼保連携型認定こども園 常石すくすくハウス・²美作大学短期大学部)

背景と目的

近年、乳児期の子どもが、床面で匍匐姿勢の遊びに抵抗し、縦抱き姿勢の抱っこや座位姿勢を好み、ハイハイをしない、またハイハイをしても足の指をつかわずに這うことが以前と比べ多いと感じていた。そこで、Emmi Pikler(1968, 1972)の粗大運動等に関する実践研究を参考にし、「禁止されない自由な空間と十分な安全性のある中で、大人が見守ることが大切である」保育方針をもとに、乳児の運動発達と保育者の見守りの在り方の関連性について検討した。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領「遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し、自らの体を動かそうとする意欲が育つようにすること」の具体的な保育内容に着目し、乳児の運動発達を促す保育者の見守りを大切にされた保育の中で、様々な玩具や環境における自発的かつ自由な運動（柔軟性や順序性）を観察、検討した。

方法

入園時生後3か月のA児を8か月間、本児の保護者にも協力を仰ぎ、本児にとって能動的な運動発達を促す見守り方、抱き方などの人的環境、玩具の選定方法、扱い方などの物的環境に配慮した保育を実施、写真撮影、記録により事例を検討した。保護者へは事前に調査の趣旨と調査内容などを説明した文章を渡し、使用する写真や使用箇所、記録内容について随時確認と同意を得た。

結果

要領が示す「特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成される」ゆるやかな担当制保育を実践し、本児の定額完成までは横抱きにし、自ら床面で仰向け姿勢で遊ぶ際は、傍で温かく言葉掛けしたり見守ったりした。その後、自分の手や足で遊ぶ姿も見受けられるようになった。本児の機嫌がよくない理由は、生理的欲求を求めてくることが多く、それ以外は安心して床面で遊んでいたため、抱っこや、おんぶは不要であった。仰向きからうつ伏せへ寝返る過程では、様々な体位や姿勢をみせ、横向き姿勢で片足を浮かせたり、自分の足を触ったり、足の親指で体を支えるなど柔軟性も見られた。座位獲得後も、床面に仰向け姿勢に寝かせると、その状態のまま安心して遊び、しばらくして自ら寝返り、座位へとスムーズに体位を変換していった。保育者が本児の両足を前方に投げ出した状態の座位で最初から床面に置くと、自ら次の体位への変換が困難で泣き出してしまいうというケースがあった。

考察と結論

本研究では、以下2点の可能性を支持するものとなった。

○A児と愛着形成の確立された担当保育者等の見守りの中で、乳児自ら床面で遊びを楽しむ経験を十分に保障することは、乳児の自発的な運動発達と情緒の安定に影響している可能性があると考え。○A児のようにハイハイ獲得後、座位を獲得すると、肢の筋力が安定し体のバランスが良く、座位からハイハイやつかまり立ちなど他の体位に自分からスムーズに変換でき、自らの体を動かそうとする意欲が保障されるのではないかと考える。

今後、様々な生育歴の乳児から、姿勢・運動の変化など明確にし、乳児期の自発性を検討する。

